

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	《依存》と《隷属》の社会：目取真俊「虹の鳥」論
Author(s)	尾西, 康充
Citation	近代文学試論, 56 : 27 - 34
Issue Date	2018-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/49048
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049048
Right	
Relation	



《依存》と《隷属》の社会―目取真俊「虹の鳥」論

尾西康充

1

目取真俊の「虹の鳥」（「小説トリッパー」二〇〇四年冬季号、二〇〇四年一二月、朝日新聞社）は、全篇を通じて暴力がみなぎった小説である。その暴力の起源は、五九万の県民の内一二万名が戦死した沖縄戦であり、沖縄本島の面積約一五%を強制接収して設けられた米軍基地にあるとされる。

もし戦争がなく、米軍基地として強制接収されることがなければ、カツヤたちも金網の向こうの土地に生まれ育つたはずだった。そうだったら、今とはまったく違った人生を生きていたはずなのに……。カツヤの人生だけでなく、両親や祖父母、戦後の沖縄を生きた村の人々、全ての生き方が変わっていたはずだった。

国家による圧倒的な暴力の前には、いかなる市民も無力である。本来の生き方をねじ曲げられてしまったことは、だれの目にも明らかである。軍用地料で生計を営んでいるカツヤの父はよく、「反対運動が盛り

上がらないと、軍用地料も上がらないし、政府の補助金も増えない」と口にしていたという。表面的には基地反対運動を支持しているかのように見えるが、実は米軍基地に依存し切った生活を送っている。このように米軍基地との共犯関係を持つ人びとを覚醒させ、「本気で米軍を叩き出そう」と思うのなら、「吊してやればいいんだよ。米兵の子どもをさらって、裸にして、五八号線のヤシの木に針金で吊してやればいい」という手段が、暴力団琉誠会との関わりのある比嘉によって示される。暴力に対抗する究極の方法は、圧倒的にそれを上回る暴力をみせつけるしかないとの考えである。

だが、カツヤや松田たちを使喚して沖縄の少女を凌辱して金儲けをしている比嘉の行動は、まったく正当化できない。非道な暴力によって維持される比嘉のアウトロー集団は、沖縄の社会を内部から喰い荒らしているという点では、米軍以上に罪深い。

カツヤと比嘉の出会い、中学生時代にさかのぼる。沖縄市にある中学にカツヤが入学すると、比嘉をリーダーとする上級生たちのリンチが待ち受けていた。比嘉のグループは「長期にわたって全生徒を支配する方法」を確立していた。カツヤからすれば、「普通の生徒の呼び出し

が何を基準に行われているのかは不明だった。それが学校内での生徒たちの行為全てに不安をつきまわらせていた。暴力による被害を少しでも軽くするには、「比嘉に気に入られる以外に、安全に過ごす方法はなかった。気に入られるためには、人より多くの金を出し、より従順に振る舞うこと、中学一年のカツヤには、それしか思いつかなかった」。カツヤは比嘉の強さに「他の上級生とは違うものを感じて、惹かれるようになっていた」。比嘉よって売春をさせられクスリ漬けにされた少女のなかには、「本気で比嘉に金を貢ごうとしている少女も少なくなかった」という。この小説の全篇にみられる支配と抑圧のメカニズム——自分を傷つけた相手に依存する、一見奇異に見える行為——がそこに存在するのである。監禁状態におかれた暴力の犠牲者、あるいはDVにさらされた家族にみられる《共依存》の心理傾向に通じるといえよう。このように倒錯した状態は、沖繩の少女が犠牲になりながらも、駐留経費負担経費（「思いやり予算」）を支払い続け、米軍への依存を止めようとしない日本政府の喩として読めるのではないか。¹ 本稿では、「虹の鳥」を取り上げながら、マイノリティ社会が抱える矛盾——自分たちを周縁化するマジヨリテイとの関係が、コミュニティの内部に転移され、さらなる支配と抑圧を生み出している——を考察してみたい。また、第二次世界大戦下ナチスに支配された地域で設置されたユダヤ人評議会が矛盾に満ちた役割を担っていたことや、ドストエフスキーの文学が少女の凌辱という衝撃的なテーマを扱っていたことなど、「虹の鳥」を読み解くための手がかりとして活用してみよう。

2

マイノリティ社会における支配と抑圧のメカニズムを分析するため、まず反ユダヤ主義と闘いシヨアーを生き延びたユダヤ人社会を例にとつて検証してみよう。第二次世界大戦終結後、ユダヤ人シオニストのグループは、ナチスの絶滅計画に対抗するには、自衛のための積極的な武装活動が必要であったとし、とりわけワルシャワゲットーのレジスタンス闘士が称賛された。イスラエルでは、国家建設の礎となるパレスチナ生まれのユダヤ人が理想とされたのに対して、ヨーロッパの強制収容所からの生還者は、「せつけん」という俗語で呼ばれ、シヨアーに受動的にしか対応できなかったことが暗に批判されていた。だが実際に銃を手にしたレジスタンス闘士がほんの少数であったことを考えれば、そのような神話は、ナチス支配下におかれたユダヤ人共同体の実態をみえなくしてしまう。ユダヤ人評議会は「ドイツ官僚機構の延長」でもあったのだ。² 大著『ヨーロッパユダヤ人の絶滅』を上梓したラウル・ヒルバークは、ドイツ人はユダヤ人の協力なしにはユダヤ人絶滅政策を遂行できなかったと結論した。この後大論争を巻き起こすこととなるヒルバークの主張は、「神、王、法律、契約を信頼するユダヤ人の伝統」や「最終的に、経済的に利用価値のある者を遂行者が破壊することはあるまいというユダヤ人の計算」を考慮することからはじまっている。なぜなら「このユダヤ人の戦略こそは、協調を強要し、抵抗を排除したものであった」からである。³ ナチスによってヨーロッパ各地に設置されたユダヤ人評議会は、伝統的な「ユダヤ人の戦略」に従って、ナチスへの「適応と順応」をユダヤ人に説いた。

評議会は、ドイツにとつての道具だっただけではなく、ユダヤ人社会における機関でもあったのだ。彼らの戦術はユダヤ人が何世紀にもわたって実行してきた適応と順応の延長だった。私はユダヤ人指導者と一般のユダヤ人を別々に見ることはできない。指導者たちは、ユダヤ人によって長い間受け継がれてきた危機に対する反応の基本的姿勢を代表していたからだ。⁴

ユダヤ人指導者は、自分たちを支配している者に「適応と順応」を示すことによって苛酷な反ユダヤ社会を生き延びてきたという経験知を受け継いできた。だがそれは同時に、一般のユダヤ人に権力に抵抗する意志を放棄させる結果になった。ハンナ・アーレントによれば、このような悪弊を持つユダヤ人社会は「跪いて生きることを選ぶ人間は、跪いて死ぬ」のだとされた。⁵「パリアとしてのユダヤ人」のなかで、アーレントは、反ユダヤ主義を批判する研究者ベルナル・ラザールの説を引きながら、ユダヤ人社会にある「二重の隷属」とは、一方で、周囲にある敵対的な要素への依存であり、他方で、敵対者とういうわけか手を携えている自民族の「高位の同胞たち」への依存を意味する⁶という。そしてユダヤ民族の命運において「比較にならないほど深刻で決定的だったのは、パリアが反抗者になることを端的に拒んだという事実」であったとする。⁷

「反抗者」になることをあえて断念してきたというのは、武器を放棄した歴史を持つ沖縄人の心性に通うものがある。圧政者に対して武装蜂起することがなかったこと、そして他民族による支配に妥協して生きることを導いてきた沖縄の指導者の姿勢も、両民族の共通点として

あげられるのではないか。そこには、民族コミュニティにおける権威と依存の強い関係がみられるのである。

カツヤが比嘉に気に入られるためには、少しでも多くの金を渡すことと、より従順に振る舞うことしかなかった―たとえそれらを実行したとしても暴力から逃れることはできなかったのだが―。カツヤの場合、不動産管理会社を経営する父親宗進が愛人をつくと、母親久代は、資金の半分を宗進に出してもらい二四時間営業のゲーム喫茶を開業する。子どもに無関心な両親は、カツヤが暴力の被害を受けていることを知らないが、金銭面ではルーズである。そのためカツヤが一線を越えて比嘉の支配に抵抗することがない。カツヤに預けられている少女たちと同じように、カツヤ自身も生かさず殺さずという状態におかれている。「上納金の額にしても、暴力にしても、下級生を過度に追いつめることもしなければ、不安と緊張を失わせることもしない。長期にわたって全生徒を支配する方法を比嘉のグループは確立していた」のである。

谷口基氏によれば、比嘉は「基地経済がもたらす不安定な沖縄の生活環境の上にこそ存在可能なアウトロウとして造形」されている。彼らは「血縁地縁」が強い結束力を持つ沖縄古来の共同体からはじき出された孤独な家庭や、「経済原則を無視した軍用地料の値上げ」によってモラルが崩壊した家庭の中に獲物を見出すのだ⁸という。軍用地料による収入という条件を除けば、都市郊外の核家族化や家庭崩壊など、国内に広くみられる、じめの社会背景と似通っているともいえる。だからこそ「虹の鳥」の随所に描かれる陰湿な暴力の現場を、読者が実感をもってイメージできるのである。

しかし暴力によって支配された比嘉のアウトロー集団は、米軍基地に依存して成立している沖縄社会そのものの象徴である。佐藤泉氏が指摘するように、「虹の鳥」が男女の非／人間の形象化を通して示したテーマは、軍用地政策とは人間の作り替えではなかったか、というものだ。すなわち「人間の外部でも内部でもない生ける死者の形象」が描き出されたというのである。その一方、彼らは外部の権威に順応する伝統的な沖縄社会とは異質の傾向を持つ人間である。比嘉のみならず彼の仲間の松田も、テレビに映る抗議集会をみて「こんだけ集まったんだったら、基地の金網破って中に入ってた、アメリカ兵を叩き殺してやればいいのによ。いくら口だけわーわー騒いでも、アメリカーたちは痛くもかゆくもないだろう」という。だが胸中に「底のない空虚」が存在しているような比嘉には、既存の沖縄社会に対して真に革命的なインパクトを与える行動をとることができず、若者たちを非道な暴力で支配し、沖縄の少女を蹂躪するだけの生き方しかできない。琉誠会という暴力団のヒエラルキーに所属する一走狗でしかない。そこに絶望的な社会の闇が垣間見られるのである。

3

ベトナム戦争当時、ヤンバルの山中にある北部訓練場で米軍特殊部隊がゲリラ戦の訓練をおこなっていた。カツヤにとって、中学の社会科教師から聞いた、つねに死と隣り合わせに生きている特殊部隊のイメージが「沖縄でもっとも充実した生を生きている者として、鮮烈な印象を残した」。このような倒錯は、もし今も米兵がヤンバルの森にいるな

ら「森の中で彼らに襲われ、頸動脈を切られて殺されるなら、それでもよかった。今の自分には、それ以上の死はないような気さえた」という妄想にまで発展した。生きているのか死んでいるのか分からないような空虚感を払拭するには、過激な暴力による死が必要であるとさえ感じていたのである。

ホテルの浴室で比嘉にシンナーを浴びせて焼き殺したのは、健康を損なって廃人になりかけ、もはや性的な商品として使えなくなっていたマユであった。さらにマユは、ヤンバルの森を目指してカツヤと逃走中に、立ち寄ったマクドナルドで、アメリカ人の若い夫婦の少女をさらい、車のなかで殺害しようとする。車を運転するカツヤに向かって「さつさと出せよ、クズ」と「低く強い声」で発した。カツヤには「初めてマユの本当の声を聞いたような気がした」という。彼女を貶めるために、彼女を取り巻く男性が使っていた「クズ」という言葉を、彼女がはじめて投げ返したのである。これまで暴力をふるわれ続けていたマユが、はじめて報復という主体的な行動に出た瞬間であった。

しかし、自分に直接的な暴力をふるう比嘉に対する報復と、自分とは何の関係もないアメリカ人の少女の殺害とは、同じ意味を持つのだろうか。アメリカ人の少女を殺す動機がマユにあったとは到底思われえない。なぜマユの手にアーミーナイフが握られていたのか。これが小説という虚構のなかでの殺害という象徴的な行為であるのはいうまでもないのだが、アメリカ人の少女を供儀に捧げることが、本当に必要なか。そして比嘉や松田ではなく、なぜマユが殺害するに至ったのだろうか。

目の前の現実を変えるには、報復以外にもはや手段は残されてい

ない、というのがカツヤの心境であった。一九九五年九月の米兵少女暴

行事件に際して、八万人をこえる県民が抗議集会に参加した。これは、

この作品の背景となっている事実だが、カツヤは、集会でマイクを持って「八万五千の人々に訴えている少女の姿は美しかった。だが、必要なのは、もつと醜いものだと思った。少女を暴行した三名の米兵たちの醜さに釣り合うような」と感じていた。比嘉が語ったように、「本気で米軍を叩き出そう」と思うのなら、米兵の子どもを殺害して吊るすこと、

「それ以外の方法はない」。 「そこまでやらなければ、アメリカ人も日本人も、いや沖繩人だって本気で考えはしない」とする。この小説のなかに、あえてショッキングな殺害を取り込んだ目取真の意図は、米軍基地が沖繩社会にもたらしている暴力の現実を明確にしようとしたことにある。アメリカ人に、日本人に向けてそれを訴えようとしただけではなく、何よりもまず沖繩人自身に—米軍基地に依存し、日本政府に依存し、沖繩の保守系指導者層に依存している—を打破することに向けられていたのではないか。アメリカ人の少女を殺害することは、もはや内外の権威に依存する《二重の隷属》に後戻りを許さない状態におちいらせるための企みであったと考えられるのである。

マユの態度の変化は、彼女の背中に彫られた「虹色の鳥」の刺青がイメージを変えてゆくことに象徴される。「虹色の鳥」は、つぎのような図柄であった。

左の肩に向けて斜め上を向いている鳥は、赤や黄や青、緑、紫の羽根に包まれ、虹色に彩られた翼を左右の肩胛骨の上に広げている。光の粉末を振りまきながら長い尾が腰と脇腹に流れ、頭部の飾り羽根

はマユの首の方へ弧を描いている。

美しい鳥の刺青なのだが、「本来ならそこには、鋭い嘴を持った宝石のような頭部があるはず」の場所に、おそらく「何度もタバコの火を押しつけられたのだろう」、「肉のひきつれ」が「赤茶色く丸い隆起」となっていた。作品の結末部では、二件の殺害を実行したマユの背中で「虹の鳥」が再生する。

固い種子が割れ、新芽が芽吹くように火傷の傷が消えて、新しい皮膚が現れる。青や緑の羽毛に縁取られた緋色の顔。金色の虹彩と漆黒の瞳が夜の森を見る。鋭い嘴が開き、鳥の鳴き声がこだまする。樹間に差し込む月の光がマユの体を照らし出し、ゆつくりと上げられる左右の手の動きに合わせて、肩胛骨の上の翼が羽ばたき始める。羽音がしだいに大きくなり、マユの背中を離れた鳥は、七色の光を放ちながら夜の森を舞う。

「虹の鳥」を目撃したカツヤは幻想にとらわれ、「喉にアーミーナイフが当てられる感触」に目を閉じる。「そして全て死に果てればいい」と感じ、「体の奥から笑いが込み上げてくる」という。

カツヤとマユがヤンバルの森を目指して逃走したのは、そこに「幻の鳥」がいるという伝説があったからである。米兵たちはそれを「レインボー・バード、虹の鳥」と呼んでいる。「もし森の中でその鳥を見ることができたら、どんな激しい戦場に身を置いても、必ず生きて還ることができる」と信じられていた。だが「その鳥を見た男は生き延びること

ができるが、代わりにというか、部隊の他の仲間が全滅する」という。逆に「他の仲間が生き延びるためには、虹の鳥を見た男を殺さなければならぬ」とされるのである。

カツヤは自分だけが生き延びること願い、作品の最後まで受動的な生を送っている。報復という行動をとったのはマユであり、カツヤはそれを傍観していただけである。カツヤの発想はつねに、もしあのようなことがなければ今とは違う自分であったはずなのに、もしあのことがなければ違う人生になっていたのに、というレトロスペクティブなものである。カツヤは「マユを哀れむ振りをして、自分を哀れんでいるだけではないか、今さら何を悔やんでも無駄だ」とさえ感じている。だが破滅の淵に足をかけていながら、周囲の状況に助けてもらっていつもそれを何とか回避できているために、依存の体質は一向にあらたまっていない。「そして全て死に果てればいい」というカツヤのセリフは、小説の最後に至るまで、自己の現実を見据えようとしないうカツヤの態度を示している。ヤンバルの森にたどり着けば、彼は再生できるのか、いや警察による捜査の手にからみとられるだけだろう。

4

少女を凌辱してもよいか、という身の毛のよだつようなテーマが論じられるのは、ドストエフスキーの『悪霊』である。『悪霊』第二部第一章5には、スタヴローギンとキリーロフによって衝撃的な内容の対話がおこなわれる。人こそが神であるという《人神思想》を抱くキリーロフは、「人間が不幸なのは、自分が幸福であることを知らないから、

それだけです」という。それに対してスタヴローギンは、「でも、餓死する者も、女の子を辱しめたり、穢したりする者もあるだろうけれど、それもすばらしいのですか？」と反論する。実は彼には、マトリョーシヤという一二歳の少女を誘惑して凌辱し、死に追い込んだ過去がある。キリーロフは「すばらしい。赤ん坊の頭をぐしゃぐしゃに叩きつぶす者がいても、やっぱりすばらしい。叩きつぶさない者も、やっぱりすばらしい。すべてがすばらしい、すべてがです」と答えるのであった。

この対話を読んで、戦後文学の作家椎名麟三は「自分の魂がふるえるといった感じ」を受け、「その作品の背後から射している光のなかに、私の求めてきた「ほんとうの自由」のたしかかな手ごたえを感じた」という。¹⁰ 椎名は、宇治川電気鉄道部（現山陽電鉄）に勤務していた頃に労働運動に参加するのだが、一九三二年に治安維持法違反の容疑で検挙される。転向上申書を提出して未決監の独房から釈放された三三年頃、精神的な虚無をさまよっていた。そのとき読んだのがドストエフスキーの『悪霊』であったのである。

椎名によれば、キリーロフの言葉は「人間はすべて許されている。しかしそのことをほんとうに知った人間は、女の子をはずかしめたりなどはしないだろう」と要約される。¹¹ だが「すべて許されている」とことと「悪行をなさない」との間には、論理的なつながりはない。その矛盾を解決するためには、「客観的な全般的な自由」から「個人的な自由として道徳を守る」ことが導き出されていなければならない。すなわち「人間はすべて許されているということ、イエス・キリストにおいて知っている者は、小さな女の子をはずかしめたりはしないだろう」と置き換えることで、「人間の全般的な自由と個人的な自由とが矛盾なく両

立」できるようにするというのである。¹²⁾

椎名の解釈には、全的な神の自由な恩恵にもとづく人間の救済というキリスト教信仰が背景にある。だが「虹の鳥」には、《虹の鳥》を目撃した米兵のエピソードに表されるように、自分が生き延びて仲間が死ぬか、あるいは仲間が生き延びて自分が死ぬかの二者択一である。そこには神の恩寵が入り込む余地がなく、生存を賭けた人間同士の闘争が導き出される。すなわち暴力で相手を圧倒するほかないのである。神なき時代、神が喪われた風土には、もはや報復という手段しか残されていない。

ところで、善悪を超越した気になり、万事に無関心を装っていたスタヴローギンは、マトリョーシヤの幻をみる。「あのときと同じように、私の部屋の戸口に立って、私に向って顎をしゃくりながら、小さな拳を振り上げていたあのときと同じように、げっそりと痩せこけ、熱をもつたように目を輝かせているマトリョーシヤを。いまだかつて何ひとつとして、これほどまで痛ましいものを私は目にしたことがない！」。あのときのマトリョーシヤの顔だけがスタヴローギンに無関心の病から脱け出させ、自己の存在を耐え難くさせるのである。

「虹の鳥」では、マユに殺されるアメリカ人の少女の顔は、「髪に覆われて少女の顔は見えない」とされている。ここには、「米兵の子どもを殺して吊るす」というこの殺害の抽象的な意味合いがみられるだけで、少女を殺すことが実感としてとらえられていない。つまり人格をもつた一人の人間の死として描かれていないのである。この少女の顔が描かれたであろうか、そして読者は、死の恐怖に満ちた、あるいは暴力から何とか逃れようと抵抗する、少女の《顔》を受け入れられたであろう

か。それを報復の結果だと突き放してとらえられることができるのだろうか。

暴力をふるう男性との間で《共依存》の関係におちいったマユは、男性の欲望を無意識に投影させたふるまいをみせる。殺人を実行したのはマユだが、殺意の衝動を彼女に植えたのは、彼女を取り巻く男性たちである。この作品を読むに際して、性暴力の被害者であるマユが殺人を犯してもやむを得ないと済ませてしまうようであれば、この小説の倫理的な破綻を意味する。なぜなら一人の女性に罪をかぶせるやり方こそ、男性集団によるジェンダー支配の奸智にほかならないからである。《依存》と《隷属》の社会構造をとらえなければ、マイノリティ社会が抱える矛盾はみえてこないのである。

「虹の鳥」では、米兵少女暴行事件に重ね合わせられるように、マユ、カツヤの姉仁美たちが性暴力の被害者として、きわめてリアルに描き出されている。銘荊純一氏によれば、「虹の鳥」の初出本文と初版本文（二〇〇六年六月、影書房）では、仁美が米兵にレイプされる設定が加筆されていること、被害女性たちが重なりをもって描かれるようになったことが異なっているという。¹³⁾

カツヤにとつて墮落した生活を送る二人の兄とは異なつて、仁美は学費や生活費はすべて自分で賄って九州の短大を卒業した。結婚して子どももいるが、教員になる夢はあきらめていない。米兵少女暴行事件を知った久代が、米兵も悪いが夜に小学生を一人で外出させる親も悪いというところ、「そんな言い方はないでしょう。悪いのはアメリカ兵さ。相手は子どもだよ。被害者に落ち度があるみたいない方をするのはおかしいさ」と反論する。基地のおかげで経済が潤っているとはいえ、

「だからといって、何をされても黙っているのは、もっとおかしいさ」という。彼女は「カツヤ、世の中は変わるよ、自分の力で生きなさいよ。あんたならできるさ」と励ます。松木新氏は「虹の鳥」書評を執筆して、「基地地主二万九千人、年間の地代八百億円という沖縄の現実を考えると、「自分の力で生きなさいよ」という言葉の重みは計り知れない」と評価していた。¹⁴しかし再び銘荊氏によれば、目取真がその書評を読んだかは分からないが、「親の軍用地料を拒否し、自力で短大を出て教員免許を取得し、作中では唯一浸潤する暴力から逃れ、「人間らしさ」を維持した仁美に希望を託すという指摘は、仁美へのレイプという加筆によって拒絶される」とする。¹⁵仁美の克己心によってしても沖縄の現実には「何も変わらない」という結論が導き出されるのというのである。

『カラマーズフの兄弟』の三男アリーシャが純粹無垢な存在であったように、仁美も姉のなかでは、最も優れた倫理観を持った人物であった。彼女に米兵にレイプされた過去があったことを加筆することは、決して彼女の価値を下げるものではなく、沖縄ではどの女性も苛酷な現実と無縁には生きられないということを強調するためであったのではないか。絶望的な現実に抗いながら、それでもなお自立して生きることの大切さを仁美の生は伝えているのである。

注

(1) 奥野修司「「虹の鳥」目取真俊 暴力と憎しみで沖縄の現実を描く」(『文学界』第六〇巻第九号、二〇〇六年九月、二四三頁)には、「沖縄は基地という暴力で蹂躪され、少女のようにいつレイプされるともしれない予感」。それゆえにカツヤと比嘉の関係が、沖縄とアメリカ(日本政府)の関係のメタファーとして映る」という指摘がある。

(2) ラウル・ヒルバーク『記憶—ホロコーストの真実を求めて』(一九九八年一月、柏書房、一四五頁)

(3) 同右。

(4) 同右、一七六頁。

(5) ハンナ・アーレント『起こっていないユダヤ戦争』(『反ユダヤ主義 ユダヤ論集1』、山田正行他訳、二〇一三年九月、みすず書房、二三八頁)

(6) ハンナ・アーレント『パリアとしてのユダヤ人』(『アイヒマン論争 ユダヤ論集2』、齋藤純一他訳、みすず書房、二〇一三年九月、六六頁)

(7) 同右、六七頁。

(8) 谷口基「不可視の暴力を撃つために—目取真俊「虹の鳥」論」(『立教大学日本文学』第九七号、二〇〇六年二月、一八九頁)

(9) 佐藤泉「一九九五—二〇〇四の地層 目取真俊「虹の鳥」論」(新城郁夫編『攪乱する島 ジェンダー的視点』、二〇〇八年九月、社会評論社、一六八、一七三頁)

(10) 椎名麟三「ドストエフスキーと私」(『信徒の友』第三四号、一九六六年七月)、引用は『椎名麟三全集』第二〇巻(一九七七年四月、冬樹社、八一頁)

(11) 椎名麟三「悪霊」(『月刊キリスト』第一八巻第六号、一九六六年六月)、引用は同右書、一三七頁。

(12) 同右。

(13) 銘荊純一「目取真俊「虹の鳥」の異同」(『人間生活文化研究』第二二号、二〇一二年一月、一〇九頁)

(14) 松木新「「虹の鳥」のことなど」(『民主文学』第四七三号、二〇〇五年三月、一六四頁)

(15) 前掲(13)、一一二頁。

付記

『虹の鳥』の本文は、単行本版(二〇〇六年六月、影書房)、『悪霊』の本文は新潮文庫版(江川卓訳)に拠っている。

(おにし やすみつ、三重大学人文学部教授)